

【 復活のトロパリ 第5調 】

しんじゃよ、ちちとせいしんとともにはじめ
信者父聖神共に始

なきことばわがすくいのためえに
言吾救た爲

どうていぢょよりうまれしものをほめうとて
童貞女生者讃歌

おがむべし、かれあまんじてそのみにて
拜彼甘其身

じゅうじかにのぼおりしをしるのびそのこ光
十字架上死忍其

うえいのふくかつにてしせしものを
榮復活死者

ふくかつせしめたまあえばなあり。
復活給

【 聖世祖主日のトロパリ 第2調 】

こうえいはちちとこいとせいしんにきい
光榮父子聖神歸

す、

しんのかんかりよくはおおいなるかあな、み
信感化力大哉三

たりのしょうしゃはほのおのいづみのなかにあ
少者焰泉中在

り て 、 あんそく の みづ に お け る が ご と く よ
安 息 水 於 如 喜

ろ こ べ え り 、 よげんしゃダニ イルもししを
預 言 者 獅

ひ つ じ の ご と く ぼ く す る も の と し て あ ら わ れ
羊 如 牧 者 顯

た あ り 。 ハリスト スか み よ 、 か れ ら の
神 彼 等

き と う に よ っ て わ れ ら の た ま し い を す く い た 給
祈 禱 因 我 等 靈 救 給

ま あ え 。

【 聖世祖主日のコンダク 第4調 】

い ま も い つ う も よ よ に 、 ア ミ ン。
今 何 時 世 世

み え に ふ く た る も の は て の し る し た る か た ち
三 重 福 者 手 記 像

を う や ま わ ず し て 、 し る さ れ ぬ し ん せ い に
敬 記 神 性

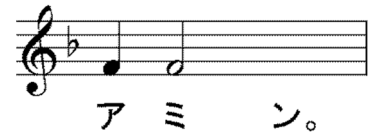
よ う ご せ ら れ て 、 ひ の げ き じ ょ う に え い を
擁 護 火 劇 場 榮

え た あ り 。 か れ ら は た え が た き ほ の お
獲 彼 等 堪 難 焰



司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讃榮を奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
聖 神 聖 勇



司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 プロキメン 提綱 聖世祖の主日 第4調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主我が先祖の神よ、爾は讃揚せられ、爾の名は世世に讃美讃榮せらる、

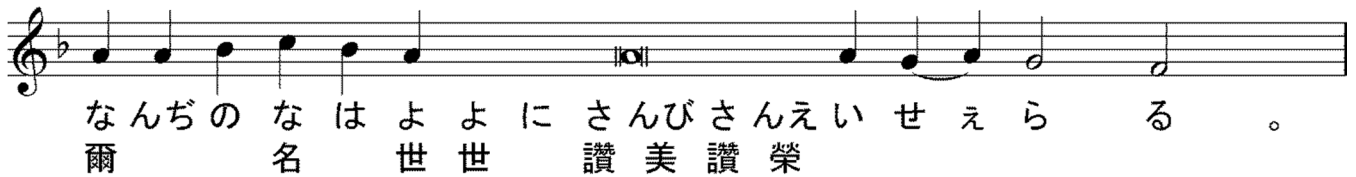


誦經) 蓋爾は凡そ我等に行いし事に於て義なり、





誦經) ^{しゅわ せんぞ かみ なんぢ さんよう}主我が先祖の神よ、爾は讃揚せられ、



【 ^{アポストロス}使徒經 328端 エウレイ書11章9～10、17～23、32～40節 】

司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ しょ よみ}聖使徒パヴェルがエウレイ人に達する書の讀、

司祭) ^{つつし き}謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい しん きょやく ち あ おのれ ぞく ち お ごと}兄弟よ、信によりてアヴラアムは許約の地に在りて、己に屬せざる地に於けるが如く、
^{およ すなわちどういつ きょやく おな つ もの とも まく お けだしかれ}イサク及びイアコフ、即同一の許約を同じく嗣ぐ者と偕に幕に居りたり、蓋彼は
^{もとい まち かみ いとな つく もの ま しん よ ころ}基ある城、神の營み造る者を俟てり。信に由りてアヴラアムは試みられて、イサク
^{ささ きょやく う もの そのどくせいし ささ すなわちなんぢ すえ}を獻げたり、許約を受けし者にして、其獨生子を獻げたり、即爾の裔はイサクに
^{よ とな い ところ もの けだしかれおも かみ またし ふくかつ}由りて稱えられんと、言われし所の者なり。蓋彼意えり、神は亦死より復活せしむる
^{よく ゆえ これ よしう う しん よ しょうらい こと さ}を能すと。故に之を預象として受けたり。信に由りてイサクは將來の事を指して、イ
^{およ しゅくふく しん よ し とき ふたりのこ}アコフ及びイサフを祝福せり。信に由りてイアコフは死なんとする時、イオシフの二子を
^{しゅくふく かつそのつえ うえ はい しん よ おわ とき しよ}祝福し、且其杖の上に拜せり。信に由りてイオシフは終らんとする時、イズライリの諸
^{し い こと おも かつおのれ がいこつ こと いめい しん よ うま のち}子の出でん事を憶わしめ、且己の骸骨の事を遺命せり。信に由りてモイセイは生れし後、
^{さんげつかんそのふぼ かく けだしかれら こ うるわ み おう めい おそ われ}三月間其父母に匿されたり、蓋彼等は子の美しきを見て、王の命を畏れざりき。我
^{またなに い も およ}復何をか言わん、若しゲデオン、ヴァラク、サンプソン、イエッフアイ、ダヴィド、サムイル、及
^{た よげんしゃ こと の われ ときた かれら しん よ しょくく したが ぎ}び他の預言者の事を述べんには、我に時足らざらん。彼等は信に由りて諸國を従え、義
^{おこな きょやく う しし くち ふさ ひ いきおい け つるぎ は さ よわ}を行い、許約を受け、獅の口を箝ぎ、火の勢を滅し、劔の刃を避け、弱きよりして
^{つよ たたかい いさ いほう ぐん ついや おんな そのししや ふくかつ もの う}強くせられ、戦に勇み、異邦の軍を潰せり、婦は其死者を復活せし者として受け

たり、亦 或 者は更に善き復 活を得ん爲に、免 るるを欲せずして、酷く戮されたり、他の
 者は嘲 弄と鞭扑と、又 縲紲と圜圜との 試 を受け、石にて撃たれ、鋸にて解かれ、拷
 問に遇わせられ、刃にて殺され、綿 羊と山 羊との皮を衣て流離し、窮 乏、患 難、辛
 苦を忍び、世界に置くに堪えざる者は、曠野、山 嶺、巖 穴、地 窟に 徨 えり、此等皆 信
 に由りて 證 せられたれども、許 約せられし 所 を獲ざりき、蓋 神は我等の事に於て更に
 善き事を預見せり、彼等は我等と偕にせずしては 全 きを得ざらん爲なり。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ、信仰によって、他国にいるようにして約束の地に宿り、同じ約束を継
 ぐイサク、ヤコブと共に、幕屋に住んだ。彼は、ゆるがぬ土台の上に建てられた都を、待ち望んでいた
 のである。その都をもくろみ、また建てたのは、神である。信仰によって、アブラハムは、試練を受け
 たとき、イサクをささげた。すなわち、約束を受けていた彼が、そのひとり子をささげたのである。こ
 の子については、「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれるであろう」と言われていたのであった。
 彼は、神が死人の中から人をよみがえらせる力がある、と信じていたのである。だから彼は、いわば、
 イサクを生きかえて渡されたわけである。信仰によって、イサクは、きたるべきことについて、ヤコ
 ブとエサウとを祝福した。信仰によって、ヤコブは死のまぎわに、ヨセフの子らをひとりひとり祝福し、
 そしてそのつえのかしらによりかかって礼拝した。信仰によって、ヨセフはその臨終に、イスラエルの
 子らの出て行くことを思い、自分の骨のことについてさしづした。信仰によって、モーセの生れたとき、
 両親は、三か月のあいだ彼を隠した。それは、彼らが子供のうるわしいのを見たからである。彼らはま
 た、王の命令をも恐れなかった。このほか、何を言おうか。もしギデオン、バラク、サムソン、エフタ、
 ダビデ、サムエル及び預言者たちについて語り出すなら、時間が足りないであろう。彼らは信仰によっ
 て、国々を征服し、義を行い、約束のものを受け、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、つるぎの刃を
 のがれ、弱いものは強くされ、戦いの勇者となり、他国の軍を退かせた。女たちは、その死者たちをよ
 みがえらせてもらった。ほかの者は、更にまさったいのちによみがえるために、拷問の苦しみに甘ん
 じ、放免されることを願わなかった。なおほかの者たちは、あざけられ、むち打たれ、しばり上げられ、
 投獄されるほどのめに会った。あるいは、石で打たれ、さいなまれ、のこぎりで引かれ、つるぎで切り
 殺され、羊の皮や、やぎの皮を着て歩きまわり、無一物になり、悩まされ、苦しめられ、この世は彼ら
 の住む所ではなかった)、荒野と山の中と岩の穴と土の穴とを、さまよひ続けた。さて、これらの人々は
 みな、信仰によってあかしされたが、約束のものは受けなかった。神はわたしたちのために、さらに良
 いものをあらかじめ備えて下さっているので、わたしたちをほかにしては彼らが全うされることはない。

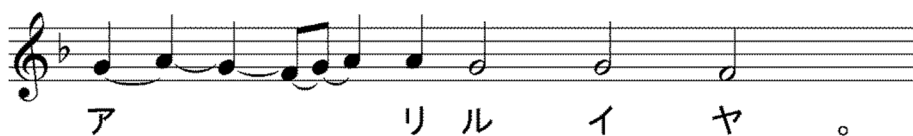
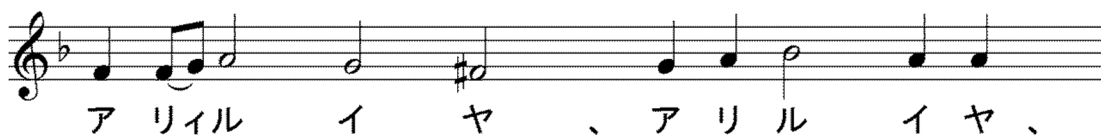
【 アリルイヤ 聖世祖の主日 第4調 】

司祭) なんぢ へいあん
 爾 に平 安、

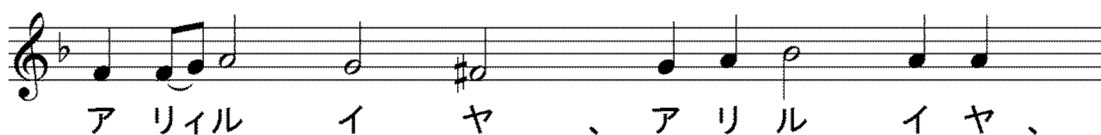
誦經) なんぢ しん
 爾 の神にも、

司祭) えいち
 睿智、

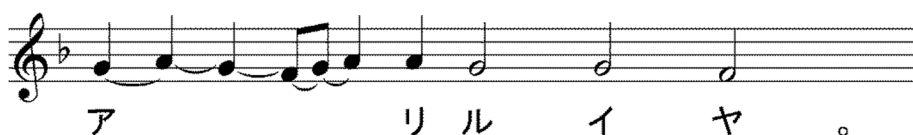
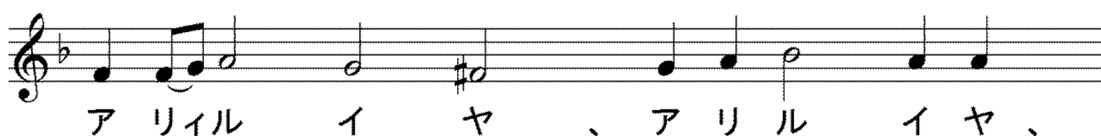
誦經) アリルイヤ、



誦經) ^{かみ われら おのれ みみ き}神よ、我等は己の耳にて聞けり、^{わ れつそ なんち おこな}我が列祖は爾が行いし事を我等に述べたり、^{こと われら の}



誦經) ^{なんち われら わ てき すく}爾は我等を我が敵より救い、^{われら にく もの はづか}我等を疾む者を辱しめたり、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや}人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、^{わ しねん}我が思念

^{め ひら なんち ふくいん おしえ さと たま わ うち なんち ふく いましめ}の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、^わ我が衷に爾の福たる誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんち よろこ ところ}畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし}を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんち わ たましい からだ こうしょう われらなんち なんち むげん ちち しせいしぜん}爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

^{いのち ほどこ なんち しん こうえい けん いま いつ よよ}て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書1端 1章1～25節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き}睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、^{しゅうじん へいあん}衆人に平安、



司祭) マトフェイ^{でん}傳^{せいふく}の聖^{いんけい}福^{よみ}音^の經^のの讀、



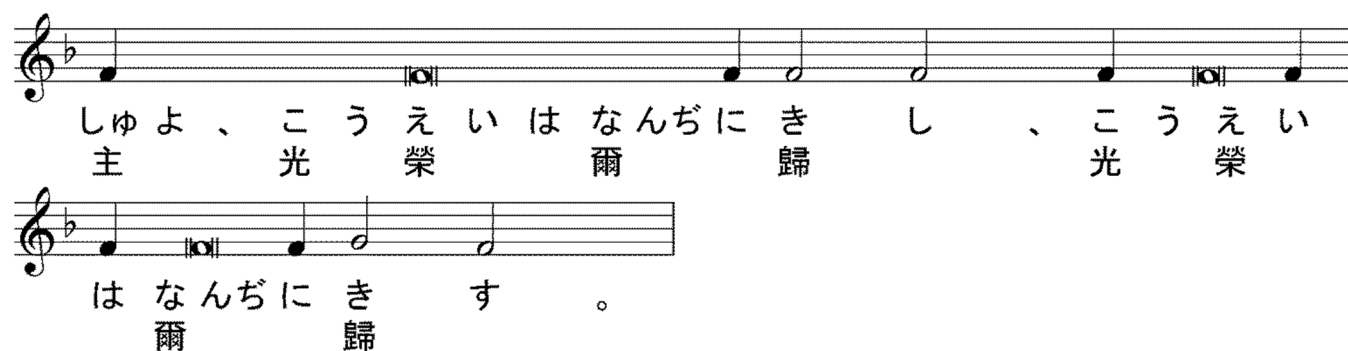
司祭) 謹^{つつし}みて聽^きくべし、ダヴィドの子^こ、アヴラアムの子^こ、イイススハリストスの族^{ぞく}譜^ふ。アヴラアム

はイサクを^う生み、イサクはイアコフを^う生み、イアコフは^{およ}イウダ^{そのけいてい}及び^う其^う兄^う弟^うを^う生み、イウダ
は^よファマリ^{およ}に^う因^うりて^うファレス^う及び^うザラ^うを^う生み、ファレスは^うエスロム^うを^う生み、エスロムは^うアラム^うを^う生
み、アラムは^うアミナダフ^うを^う生み、アミナダフは^うナアッソン^うを^う生み、ナアッソンは^うサルモン^うを^う生み、
サルモンは^よラハヴ^うに^う因^うりて^うヴォオズ^うを^う生み、ヴォオズは^よルフィ^うに^う因^うりて^うオヴィド^うを^う生み、オヴィド
は^うイエッセイ^うを^う生み、イエッセイは^{おう}ダヴィド^う王^うを^う生み、^{おう}ダヴィド^う王^うは^{つま}ウリヤ^よの^う妻^うに^う因^うりて^うソロモ
ンを^う生み、ソロモンは^うロヴァアム^うを^う生み、ロヴァアムは^うアヴィヤ^うを^う生み、アヴィヤは^うアサ^うを^う生み、
アサは^うイオサファト^うを^う生み、イオサファトは^うイオラム^うを^う生み、イオラムは^うオ ज्या^うを^う生み、オ ज्याは
イオアフアムを^う生み、イオアフアムは^うアハズ^うを^う生み、アハズは^うエゼキヤ^うを^う生み、エゼキヤは^うマナッ
シヤ^うを^う生み、マナッシヤは^うアモン^うを^う生み、アモンは^うイオシヤ^うを^う生み、イオシヤは^うイオアキム^うを^う生み、
イオアキムは、^うヴァヴィロン^{まえ}に^う徙^{およ}さる^{そのけいてい}る^う前^う、^うイエホニヤ^う及び^う其^う兄^う弟^うを^う生み、^うヴァヴィロン^うに^う徙
されし^{のち}後^う、^うイエホニヤ^うは^うサラフィイリ^うを^う生み、サラフィイリは^うゾロヴァヴェリ^うを^う生み、ゾロヴァヴ
ェリは^うアヴィウド^うを^う生み、アヴィウドは^うエリアキム^うを^う生み、エリアキムは^うアゾル^うを^う生み、アゾルは
サドクを^う生み、サドクは^うアヒム^うを^う生み、アヒムは^うエリウド^うを^う生み、エリウドは^うエレアザル^うを^う生み、
エレアザルは^うマトファン^うを^う生み、マトファンは^うイアコフ^うを^う生み、イアコフは^うイオシフ^うを^う生めり、
^{すなわち}即^{おっと}マリヤ^{とな}の^う夫^うなり、マリヤより^うハリストス^かと^{ごと}稱^ようる^うイイスス^うは^う生^うれたり。是^うく^うの^う如^うく^う世^うを

^ふ歴ること、アヴラアムよりダヴィドに^{いた}至るまで^{じゅうよだい}十四代、ダヴィドよりヴァヴィロンに^{うつ}徙さる
 るに^{いた}至るまで亦^{またじゅうよだい}十四代、ヴァヴィロンに^{うつ}徙されしよりハリストスに^{いた}至るまで又^{またじゅうよだい}十四代
 なり。イススハリストスの^う生まるること左の^さ如し、其^{そのは}母マリヤ、イオシフに^{へい}聘せられて、未^{いま}
 だ^{こん}婚せざる^{さき}先に、^{せいしん}聖神に^よりて^{はら}孕めること^{あらわ}見^{おっと}れたり。その^{ぎじん}夫イオシフは義人にして、之^{これ}
 を^{あらわ}顯に^{ほつ}せんことを^{ひそか}欲せず、私に^{かれ}彼を^{はな}離さんことを^{のぞ}望めり。然れども此の^{しか}事を^こ思^{こと}える時、^{おも}
 視よ、主の^{しゅ}使^{つかい}夢に^{ゆめ}彼に^{かれ}現^{あらわ}れて^い曰えり、ダヴィドの子イオシフよ、^こ爾^{なんぢ}の妻マリヤを^{つま}納る^い
 ことを^{おそ}懼る^{なか}勿れ、蓋^{けだし}其^{そのうち}内に^{はら}孕まれし^{もの}者は^{せいしん}聖神に^よ由るなり、^{かれ}彼は^こ子を^う生まん、^{なんぢ}爾^{その}其
 名を^なイススと^な名づけん、^{かれ}彼^{その}其^{その}民を^{その}其^{すく}罪より^{およ}救わんと^こすればなり。凡^{こと}そ此の^な事の成りしは、
 主が^{しゅ}預言者^{よげんしゃ}を^も以て^い言^{ところ}いし^{かな}所^{いた}に^{いわ}應^みうを^{どう}致^{ちよ}す、曰^こく、視よ、童女^{そのな}孕^うみて子を^う生まん、其名は
 エムヌイルと^{とな}稱えられん、譯^{やく}すれば^{かみわれら}神我等と^{とも}偕にするなり。イオシフ^{ねむり}寐より^お起きて、主の^{しゅ}
 使^{つかい}の^{かれ}彼に^{めい}命ぜし^{ごと}如^{おこな}く^{その}行^{つま}い、其妻を^い納れたり。惟^{ただいま}未^{しつ}だ室を^{おな}同じくせざるに、其^{その}家子^{しょうし}
 を^う生むに^{およ}迫^{すなわち}べり、則^な其名を^なイススと名づけたり。

(比較用 口語訳) アブラハムの子であるダビデの子、イエス・キリストの系図。アブラハムはイサクの父であり、イサクはヤコブの父、ヤコブはユダとその兄弟たちとの父、ユダはタマルによるパレスとザラとの父、パレスはエスロンの父、エスロンはアラムの父、アラムはアミナダブの父、アミナダブはナアソンの父、ナアソンはサルモンの父、サルモンはラハブによるボアズの父、ボアズはルツによるオベデの父、オベデはエッサイの父、エッサイはダビデ王の父であった。ダビデはウリヤの妻によるソロモンの父であり、ソロモンはレハベアムの父、レハベアムはアビヤの父、アビヤはアサの父、アサはヨサパテの父、ヨサパテはヨラムの父、ヨラムはウジヤの父、ウジヤはヨタムの父、ヨタムはアハズの父、アハズはヒゼキヤの父、ヒゼキヤはマナセの父、マナセはアモンの父、アモンはヨシヤの父、ヨシヤはバビロンへ移されたところ、エコニヤとその兄弟たちとの父となった。バビロンへ移されたのち、エコニヤはサラテルの父となった。サラテルはゾロバベルの父、ゾロバベルはアビウデの父、アビウデはエリヤキムの父、エリヤキムはアゾルの父、アゾルはサドクの父、サドクはアキムの父、アキムはエリウデの父、エリウデはエレアザルの父、エレアザルはマトンの父、マトンはヤコブの父、ヤコブはマリヤの夫ヨセフの父であった。このマリヤからキリストといわれるイエスがお生れになった。だから、アブラハムからダビデまでの代は合わせて十四代、ダビデからバビロンへ移されるまでは十四代、そして、バビロンへ移されてからキリストまでは十四代である。イエス・キリストの誕生の次第はこうであった。母マリヤはヨセフと婚約していたが、まだ一緒にならない前に、聖霊によって身重になった。夫ヨセフは正しい人であったので、彼女のことが公けになることを好まず、ひそかに離縁しようと決心した。彼がこのことを思いめぐらしていたとき、主の使が夢に現れて言った、「ダビデの子ヨセフよ、心配しないでマリヤを妻として迎えるがよい。その胎内に宿っているものは聖霊によるのである。彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」。すべてこれらのことが起ったのは、主が預言者によって言われたことの成就するためである。すなわち、「見よ、おとめがみごもって男の子を産むであろう。その名はインマヌエルと呼ばれる

であろう」。これは、「神われらと共にいます」という意味である。ヨセフは眠りからさめた後に、主の使が命じたとおりに、マリヤを妻に迎えた。しかし、子が生れるまでは、彼女を知ることはなかった。そして、その子をイエスと名づけた。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

※聖体礼儀③（金ロイオアン聖体礼儀）へ